

1, 活動スケジュール

- ① 講師と担任が、本日の活動について打ち合わせをしておく。
- ② 挨拶をする。
- ③ 講師の指示を聞いて活動をする。
- ④ 次の活動について聞く。
- ⑤ 活動の終わりを知り、終わりの挨拶をする。

2, 〈本日の活動のねらい及び内容〉

- ・ボールの特性を知る。
- ・よける動作を身に付ける。協応性、敏捷性、巧緻性、空間認知能力の向上

〈活動のために準備した素材や道具、環境の設定〉

道具・・・カラスの模型、フラットマーカー、マーカー、ボール

体操の講師	担任及び子どもの姿
・講師が新しい年を迎えたことを話し、お正月の挨拶を促す。その後、いつもの挨拶をする。	・姿勢をよくするように担任も子どもたちに促し、一緒に挨拶をする。
・合図に合わせて動く体操をする。手をパンと叩くと立つ。数字で1は走る、2は足でチョキ、3はグーパー、次に赤はスキップ、青はギャロップ、緑は忍者でつま先歩き、指示に合わせて動くよう促す。	・担任も子どもたちと一緒に、講師の指示を聞いて動く。よく聞いて、指示された数字や色に応じた動きを即座にすることが難しい子、よく覚えていてすぐ動ける子という。 混乱して動けない子に、担任がサポートしている。
・今日の活動について話をする。お正月遊びにどんなものがあるか、子どもに問いかける。	・「凧揚げ」「羽根つき」「コマ」「トランプ」「かるた」など、口々に言う。
・講師がタコ糸を持ってくる。	・「凧が付いてない」と口々に言う。
・凧になってくれる人を募る。凧になってくれた子に、糸を付ける真似をする。	・積極的に手を挙げた子が凧になって、講師がタコ糸をくいくい引っ張る動作に付いて走る。 ・見ていた子が凧にどんどんなっていく。やらないでステージに座っている子に、担任が声を掛け、手を引いて一緒に凧になって楽しむ。そのうち、担任が手を引かなくても自分からやるようになる。
・次に羽子板を持ってくる。	・羽根がないことを言う。「私、羽根になる」と流れを分かっている子が言う。
・講師と担任が羽子板を持って、ゆっくり打ち合う動作をする。	・子どもたちが、羽根が飛んで来ると予想される方向にゆっくり小走りする。打ち合う講師と担任の動きに合わせて、子どもたちが行ったり来たり走る。やらない子に「〇ちゃんが来てくれると、先生、うまく打てるんだけど」と言って、「カコーン」と言うと、音に合わせて仲間に入って動き出す。
・次にビブスを投げて取ったり、腕や頭、おなか、足	・子どもたちが早速ビブスを取り、それぞれのやり

などで受け止めたりする動きをやって見せる。そのほかにも、「投げた時にパンパンと手をたたいて取ったり、くるっと回って取ったりしてもいいよ」と伝える。	方で始める。うまくいなくて笑い転げる子、投げて顔や頭、足で受け止めて楽しむなど、それぞれのやり方で楽しむ。
・最後にボールよけゲームをすることを伝える。中あての導入のようなゲームである。 ボールに当たったら、石に見立てたところで片足立ちをし、戻れるルールを知らせる。 しばらくして、転がしからバウンドボールでする。	・フラットマーカーで丸をつくり、講師と担任とで向かい合いボールを転がす。当たった子は、石に見立てたマーカーのところで片足立ちをして戻ってくる。
・終了後、振り返りをする。講師から「当たらなかった人！今日のチャンピオンです。みんなよくボールを見てたね」と誉められる。	・講師にも誉められ、満足気な子どもたちだった。
・今日の活動の終わりを伝える。	・姿勢を良くして終わりの挨拶を、声を揃えて言う。

3、振り返り

- ・講師が打ち合わせておいたことで、講師の動きの意図が分かった上で、担任が子どもたちの動きを見てやらない子やうまくいかない子への援助することができた。
- ・講師の指示で担任も仲間に入り、子どもたちの動きを見ながら動いた。講師と一緒にする実践指導は参考になった。
- ・最初に体を温めて、ほぐすことが怪我の予防につながるということが分かった。準備時間を待たせるだけでなく、数字や色の認知、そして色からのイメージを引き出していた。子どもが今までにやったことのある動きを考えて、状況判断して動く体操になっていた。
- ・凧や羽根つきの動きも、誘導する講師や担任の動きをよく見ていることで、凧や羽根の動きを予測して体を機敏に動かし、他の子とぶつからないように状況を判断して動いて楽しめ、体を使って温まっていた。
- ・ボール当てゲームは、中あての導入につながる動きで、いきなり中あてをするのではなく、楽しみながら、ボールに当たらないようによける動きを誘発していた。最初は転がすことから、バウンド、投げる動きと進んでいき、「よける」「自分たちも投げる」などにつながっていくのだと思った。
- ・講師の行う導入、準備をしながらの子どもとの応答性、活動の進め方を今後も保育の中で生かしていきたい。

